

## その 37

### ヒロシマの『昭和萬葉集』



原爆犠牲国民学校教師と子どもの碑

「太き骨は 先生ならむ そのそばに 小さきあたまの 骨あつまりり」

正田篠枝(『昭和萬葉集』巻 7、「さんげ」、昭和 22 年)

中島光風著『上世歌學の研究』が刊行された昭和 20 年 2 月以降、米軍の B29 による大規模空襲は、東京、大阪等大都市に壊滅的な被害をもたらした。その後、空襲は全国の地方都市に拡大し、中国地方はもとより、呉、福山等広島市近隣の街も次々甚大な被害を受けたが、B29 の編隊は広島市上空を通りすぎるだけで、広島市にはいつになっても空襲がないことに、広島市民は気づき始めていた。市民たちの中には、「広島からアメリカへたくさんの移民が出ているから、広島は空襲しないのだろう」、という噂も流れた。しかし、移民説は流言飛語の類として、広島が空襲の標的を免れていたのはその通りで、市民の直感は当たっていた。米軍は、広島を空襲することを禁じていたのである。

同年 4 月、米軍は、原爆投下の対象として、東京、横浜、川崎、大阪、名古屋、広島等を含む 10 数都市を候補地としてした。その後、順次投下目標を京都、広島、新潟にしぼるが、最終的には広島、小倉、長崎を目標に設定、広島は捕虜収容所がないことなどの条件もあり最優先目標に決定した。目標設定の最初から最後まで残っていた広島は、原爆投下の効果を測定するため、米軍は、通常爆弾による空襲を禁じたのである。

昭和 20 (1945) 年 8 月 6 日の原爆投下により広島市は壊滅した。当時、「ヒロシマの原子野には、今後 70 年間 (一説には、75 年) は、人畜の生存は不可能」、いわゆる、「70 (75) 年生物不毛」説が流布されたが、広島は見事に復興した。しかし、それから 75 年以上が経ち放射能による環境汚染は怖れた程ではなかったにしても、健康被害やその傷跡は今も残った。これまで数多の調査研究が重ねられてきたが、原爆がもたらした被害の全体像は今もなお掴めていない。そもそも、原爆によって広島で何人が傷つき、何人が死んだのかという最も基本的な問いにさえ正答がない。当時ほとんどの公共機関が壊滅し、現在の住民票に当たる「寄留簿」等の公文書が滅失したためである。これまで広島県や広島市が行った調査でも、昭和 20 年末までの死亡者数の推計は、約 4 万人から 20 数万人までと幾通りにも分かっている。現在、公的

数字として使われている、最も新しい推計が、昭和 51（1976）年に作成された、広島・長崎両市長からの「核兵器の廃絶と全面軍縮のために：国連事務総長への要請」に記された、死亡者数約 14 万人（誤差±1 万人）、ちなみに、長崎約 7 万人（± 1 万人）という数字である。

現在広島市の平和公園にある原爆慰霊碑に納められている原爆死没者名簿に記載されている名前の総数は、令和 3 年現在で、約 32 万 9 千人に上っているように、その数には、「約」や「不明」が付きまとい、うやむやで曖昧、正確に特定することはできない。

ところが、児童、生徒については例外で、とりわけ、この日広島市内の建物疎開に動員された中学 1、2 年生と国民学校高等科の生徒、つまり、10 歳から 12 歳の児童の被爆実数は、学籍簿や学徒動員簿が被災を免れたり、被爆後生き残った教師たちの手により、かなり正確に記録されていた。

昭和 43（1963）年に発行された『広島原爆戦災史』に載っているその記録は、一定の階層における被爆全数を知る上では最も正確な調査と言える。

この日市内中心部の 6 地区に分散して建物疎開作業に当たっていた生徒は、合計で 8,187 人。各地区から見えていくが、本稿で紹介してきた、作家の阿川弘之氏と万葉学者の大浜巖比古氏が卒業した中学校、それぞれ広島高等師範学校附属中学校（広島高師付中）と広島県立広島第一中学校（広島一中）の 2 つの中学校の被爆状況を、特にピックアップしながら見てみよう。

八丁堀付近（爆心地から、7～800m）

1 校、514 人の内 510 人死亡、死亡率 99%

県庁付近（爆心地から、4～700m）

9 校、1921 人の内、1852 人死亡、死亡率 98%

市役所裏（爆心地から、約 1000m）

広島一中、300 人全員死亡等、13 校、2458 人の内、1974 人死亡、死亡率 80%

土橋付近（爆心地から、7～900m）

広島 1 中、50 人全員死亡等、10 校、1786 人の内、1216 人死亡、死亡率 79%

など、全 8187 人の内、6295 人の幼い命が犠牲になったのである。学校によっては、その後の調査により、犠牲者の数はさらに増えている。

ここでピックアップした 2 つの中学校、大浜巖比古氏が卒業した広島一中は、出動した 350 人全員が死亡している。それに対して、阿川弘之氏が卒業した広島高師付中は、この記録には、その校名は載っていない。つまり、0 である。この記録にある八丁堀地区の 1 校とは、崇徳中学だが、514 人の内、510 人が死亡に対して、広島高師付中の死者 0 という数字は、けた外れに少ない。その理由は何か？それについては、次回に考える。

平和公園の西南の平和大通りに、原爆被爆教職員の会が建立した「原爆犠牲国民学校教師と子どもの碑」がある。その銘文には被爆歌人正田篠枝氏の歌が刻まれている。

「太き骨は 先生ならむ そのそばに 小さきあたまの 骨あつまり」

あの日爆心地から 1.5 キロの自宅で被爆した正田氏は、その後被爆当時の悲惨極まる情景を数々の短歌に詠んだ。この歌もその 1 首で、昭和 22 年、原爆プレスコードにより、原爆批判の新聞や書物、歌集などの出版が厳しく規制される中、GHQ による検閲を受けずに、広島刑務所で死刑覚悟、命がけで 150 部印刷した歌集『さんげ』に収められている。『さんげ』はその後昭和 54 年から 55 年にかけて刊行された『昭和萬葉集』（講談社刊）に収録された。

『昭和萬葉集』は、万葉集と同じく全 20 巻の全集で、これも万葉集にならい、天皇の御製から歌人、一般人に至るまで、1052 万首から選ばれた 5 万首の短歌が掲載されている。昭和 50 年間の時代変動とその時々日本人の生活感情を記録する、いわば、庶民の生の声の集大成であり、戦争の時代ともいえる昭和の歌の一大アンソロジーである。

『昭和萬葉集』の注によると、正田氏の『さんげ』は、被爆から半年後の 21 年 3 月には編集されており、正田自身の言葉で、「死刑覚悟」で刊行したことも書かれている。

「その当時は GHQ の検閲が厳しく、見つかりましたなら、必ず死刑になるといわれていました。死刑になってもよいという決心で、身内の者が止めるのにやむにやまれぬ気持で、秘密出版をいたしました」。

私ごとになるが、この『昭和萬葉集』が刊行された昭和 54 年から、NHK 広島放送局に勤務し、以来 5 年間、原爆番組の企画制作に当たった。以来、ヒロシマの記録を取材、整理して、2003 年『ヒロシマはどう記録されたか』(NHK 出版)を出版、14 年には、朝日文庫上下巻(朝日出版)として刊行された。前者には、「NHK と中国新聞の原爆報道」という副題をつけている。いま NHK 広島放送局と中国新聞社は、広島市の中心部の南に、広島平和記念公園がある中島を挟んで向き合う形で建っているが、昭和 20 年当時の広島中央放送局と中国新聞社ビルは、ともに市の中心部から東へ約 1 キロ、同じ上流川町の至近の距離にあった。

そして、あの日、世界史上初めて原爆の一閃により壊滅した放送局と新聞社となった。



その同じ「上流川町」の町名を聞いて、あの人がい思い出される。光風先生である。万葉学者で歌人、旧制広島高等学校国語科の中島光風教授で、阿川弘之氏と大浜巖比古氏の恩師である、その光風先生の家が、上流川町だった。この焼野原の、上の上流川町一帯の写真のどの辺りにその家はあったのだろう。

光風先生は、子供 2 人を田舎へ疎開させ、奥さんと 2 人で、その上流川の家に住んでいた。あの日、先生は、自宅で被爆し命に別状はなかったが、奥さんが配給物のことか何かで外出したまま行方不明になった。先生は炎天下、原爆の火で燃える町を、千代子夫人を求めて彷徨い歩き、1 か月後の 8 月 31 日、郊外の病院で放射能症のために亡くなった。翌年 3 月、中国から復員した阿川氏は、ふるりの広島に復員してから、自分の両親や光風先生の消息を尋ね歩き、思いがけない両親の無事や先生の被爆死を知るに至るまでに目撃し、聞き取った被爆の状況を含め、自らの戦争体験をエッセイや小説の形で発表している。しばしそれを辿ってみることにする。

中国漢口で支那方面艦隊司令部附として通信諜報活動に当たっていた海軍中尉阿川弘之氏は、昭和 20 (1945) 年 8 月 6 日午前、広島に特殊爆弾が投下され街の中心部は壊滅したという情報をいち早く知った。広島壊滅の 1 報を聞き、広島の父母も生きてはいないだろうとは思っていたが、その後ライフの写真等見て、もう十中八九まで死んでいるに違いないと思わざるをえなかった。敗戦後、通信諜報に従事した者は一兵に至るまで戦犯として処刑されるという報らせに兵士たちは狂乱していた。戦犯問題が漸く事実無根である事が分り、翌年の 2 月、収容所を出て、800 人の海軍のものと一緒に第 1 次の帰還部隊に加わり船で揚子江を下った。そして、3 月末博多港に上陸、復員した。その夜、ポツダム大尉となった大尉の襟章と袖章をそと水に捨て、復員列車で広島に向かった。(以下、「道雄」は、阿川氏のことである)

く広島が近づくにつれて、夜は明けはなれ、兵士たちはみんな眠りからさめて、真剣な顔で窓の外に原子爆弾の被害地が近づくのを待ちかまへ出した。それは又初めて見る内地の町の変った姿でもあるわけであった。(略) 果して己妻を通過すると急に被害があらはになって来た。初めはしばらく家がまばらに残り、大地震のあとのやうに傾いてゐるのが見えたが、すぐに何も無くなった。線路の右と左には、見渡す限りの瓦礫の原が果も無く続いてゐる。上海で見たアメリカの雑誌に「原子沙漠」といふ言葉が使つてあつたが、その通りの感じだつた。道雄は唾をのみ込みながら、食ひ入るやうに変わり果てた故郷の街を見つめてみた。(略)

「綺麗なもんだ」

彼はなるべく落ちつくやうにした。何もあらはしなかつた。家の辺りも北の果から南の果へ同じ焼野原である。昔は汽車から見えなかつたビルディングの残骸がぼつんぼつん見えた。焼けただれて黒く尖つた木々の姿は不気味であつた。同情してゐてくれた兵士たちは黙つた。

「でも妻が生えてゐる」、誰かが言った。ほんとにさうだつた。焼けあとに妻がよく伸びてゐた。それは何か心を明るくした。> (『年年歳歳』、「世界」、昭和 21 年 9 月号)

そして、父母の生死を追つてその後を辿ることになるが、父母はともに怪我を負いながらも無事で、郊外のあばら家に逃れてひっそり暮らしていた。「何もかも、こんな運のいい家族は広島にはあませんよ」、と人からは言われた。

翌 22 年には、小説「八月六日」を、「新潮」12 月号に寄稿している。副題に、「亡き天野孝に捧ぐ」としているが、この作品は、原爆を体験した知人友人から取材した話を、4 人家族の被災体験の証言形式で構成している。章立ては、「父の手記」、「娘の話」、「息子の手記」、「母の話」、「父の追記」となっており、そ

それぞれの悲惨な被爆体験を余すところなく書き切っている。この昭和 22 年は、前述したように、正田篠枝氏が、原爆プレスコードにより、原爆批判の新聞や書物、歌集などの出版が厳しく規制される中、GHQ による検閲を受けずに命がけで出版したのと同じ時期で、阿川氏は、後年、「作品後記」として、発行の背景を次のように書いている。

＜文学作品に対する進駐軍の検閲がきびしかったことで、雑誌「新潮」の編集長から、「パスするかどうか分らないが、とにかく組んでみる」と言われた。後遺症の問題にも触れてゐないし表立ったアメリカ批判もしてゐなかったの、どうにか検閲を通過して発表出来た。しまひの方に、「その年（昭和二十年）の十二月中旬で兵員を除く死亡者数は五万九千乃至六万四千人」といふところがあるが、この数字は少なすぎるかも知れない。執筆当時さういふ数字が出てゐたので、其のままにしてある＞（「作品後記」、昭和 52 年）

『昭和萬葉集』には、かなりの数の原爆の歌が収められている。そのいくつかを拾い読みしてみよう。「太き骨と小さな頭」の歌が載っている『さんげ』の正田篠枝さんの「母と子」の歌である。

「子と母か 繋ぐ手の指 離れざる ニツの死骸 水槽より出ず」（『昭和萬葉集』巻 7、昭和 21 年作）  
もう 1 つの「母と赤子」を巡る物語は、次回紹介するが、原爆と「赤子」というと、次の詩が思い起こされる。

＜こわれたビルディングの地下室の夜だった。原子爆弾の負傷者たちは、ローソク 1 本ない暗い地下室をうずめて、いっぱいだった。生ぐさい血の匂い、死臭。汗くさい人いきれ、うめきごえ、その中から不思議な声が聞こえて来た。「赤ん坊が生まれる」と言うのだ。この地獄の底のような地下室で今、若い女が産気づいているのだ。マッチ 1 本ないくらがりでどうしたらいいのだろう。人々は自分の痛みを忘れて気づかった。と、「私が産婆です。私が生ませましょう」と言ったのは、さっきまでうめいていた重傷者だ。かくてくらがりの地獄の底で新しい生命は生まれた。かくてあかつきを待たず産婆は血まみれのまま死んだ。生ましめんかな、生ましめんかな、己が命捨つとも＞（「中国文化」、昭和 21 年）

この「生ましめんかな」の詩で知られる詩人栗原貞子氏は、短歌 1 首が収められている。

「ほのぐらき 収容所の廊下ゆ 生きながら 死骸とともに 寝てうめけるも」（『昭和萬葉集』巻 7）

『昭和萬葉集』は、万葉集に倣って、「天皇から庶民の歌」までだとしたら、天皇の歌も見てみよう。

終戦直後の昭和天皇の歌は、「御製（天皇 御名 裕仁）」として 2 首、収録されている。

「身はいかにならとも いくさとどめけり ただたふれゆく 民をおもひて」（『昭和萬葉集』巻 7）

では、天皇の重臣の歌はどうか？ 当時「戦争継続、本土決戦」を主張した陸軍大臣阿南惟幾あなみ これちかの歌が 1 首載っている。

「大君の 深き恵みに あみし身は 言ひ遺すべき 片言もなし」（『昭和萬葉集』巻 7）

「一死以て大罪を謝し奉る」と書かれた遺書とともに、この歌が辞世の歌として残された。これは、昭和 13 年、天皇と 2 人きりで陪食した際に、その感激を詠ったものとされているが、戦争に巻き込まれた庶民たちへは、「片言」もなく、8 月 15 日早朝、割腹して自決した。

それから数時間後の正午から、ラジオの玉音放送が始まった。

